

# 藤原定家の家集編纂意織

——建久期良経家歌壇と『拾遺愚草』——

兼 築 信 行

〔正編〕と略称)、『拾遺愚草員外雑歌』(以下「員外」と略称)という、三つの成書が残っている。

自歌合は、建保四年(一二二六)二月に「撰出年来愚詠二百首結番」として初撰本が成ったが、同五年六月に改訂を行ない、同七年には順徳天皇の天覧を経て勅判を受けた。初撰本は伝存せず、建保五年改訂本(前稿本)と、貞永頃の再改訂本(後稿本)の二種のテキストが残されている。その資料的意義については、従来定家自撰の自詠秀歌撰と把握され、定家の撰歌意識や好尚を分析する対象となされてきたが、近年草野隆は、自歌合内部の自立的な論理を読み解く一連の論考を発表し、本書は単なる秀歌撰なのではなく、定家が順徳天皇を意識しつつ自身の詠作史を形象化したテキストであることを解析している。

正編は、その初撰本が建保四年三月十八日に成った旨が、上巻の「院(後鳥羽院)建保四年百首」の後に記し留められている。その識語によれば、「先撰二百之愚歌有結番事」すなわち自歌合初撰本の成立を受けて、その「遺リヲ拾フ」ために編纂したものと、という。そして、百首歌の初詠「初学百首」時と、正編初撰時、と

藤原定家には、自詠を取扱った編著として、『定家卿百番自歌合』(以下「自歌合」と略称)、『拾遺愚草』正編上中下三巻(以下

もに侍從(拾遺)の官職にあつたことをその名義に重ね合わせて、『拾遺愚草』と命名したのであつた。正編はその後、定家自らの手によって増補され、上巻(百首歌集)は貞永元年(一二三二)四月、中巻(非百首定数歌集)は寛喜元年(一二三九)十一月の作品までを収録し、下巻(部類歌集)は天福元年(一二三三)十月十一日の定家出家を訪う贈答歌までを収めている。

員外は定数歌集であり、伝本は所収内容から五類に分かたれるが、その初撰本は建久期速詠定数歌集(そのほとんどは所定の文字や歌句を所定の位置に詠み込む賦字詠・勸句詠)に「堀河題百首」を付録した形態(Ⅰ類本Ⅱ天理図書館蔵伝津守国冬筆本の形態)で、正編の初撰に引き続いて、しかも正編の余白に書きつけて「員外雑哥」の内題を付し成立したものと推定される。その後、建保末年から承久二年の作三篇を増補、末尾の「堀河題百首」はいったん割愛した後再び付載するという出入りがあったが、最終的には正編との合写状態からは独立させ、『拾遺愚草員外雑調』と称呼する一冊本となしたもののらしい。

叙上のごとく、自歌合・正編・員外の三書は、その初撰時において密接に連動しつつ、それぞれが固有の性格を担いながら改訂・増補・成長の過程を辿っているが、いまこれらの三書、就中正編・員外という自撰家集と、定家詠作史の中でも特に「高揚の時期」と称すべき建久期藤原良経家歌壇内での詠作との関係を見ることが、定家にとつての同家歌壇の意味を、歌壇史研究や作品研究の視点とはまた別の角度から考察してみたい。

定家は、員外の「堀河題百首」の前に、同百首が自己の詠作史に占める記念碑的意義を述べる識語を付し、後になってその上方欄外に、小書で自身の歌人的人生の軌跡を追懐する言辞を書き加えている。そこには「自文治建久以来稱新儀非據達磨歌、為天下貴賤被惡已欲弃置」という著名な文言が見出されるが、この建久の達磨歌期を過ぎたのがほかならぬこの良経家歌壇であつた。

次に、建久の政変までの良経家歌壇の活動を年次順に辿り、定家の出詠と家集への収録状況を整理してみたい。上・中・下は正編の巻を示し、定家歌の番号は全歌集番号とした。×印は、定家の出詠が確認できるものの、その詠作は家集に収録されていないことを意味する。

#### 【良経家歌壇定家出詠略年表】

文治五年(一一八九)

12月

雪十首歌〔下・冬・二三五七〜二三六六〕

建久元年(一一九〇) 文治六年(四月十一日)改元

9月13夜

花月百首披講〔上・六〇一〜七〇〇〕

12月15〜16日 二夜百首〔×〕

建久二年(一一九一)

6月

伊呂波四十七首初度〔員外・二九九二〜三〇三

八〕

6月

伊呂波四十七首二度〔員外・三〇三九〜三〇八

五〕

6月

文字鉤歌廿首〔員外・三〇八六〜三一〇五〕

6月

五行五方五色十五首歌〔員外・三一七〇〜三一

八四

12月27日 十題百首〔上・七〇一〜八〇〇〕

閏12月4日 十題百首披講・当座狂歌等〔×〕

建久三年（二一九二）

4月17日 良経和歌一卷に和す〔×〕

9月13日 賦字三十三首〔員外・三一三七〜三二六九〕

建久四年（二一九三）

2月13日 定家母美福門院加賀没

3月29日 良経・定家贈答歌〔下・二六一五〕

秋 六百番歌合百首〔上・八〇一〜九〇〇〕

冬 良経・定家贈答歌〔下・二六二九〜二六三三〕

建久五年（二一九四）

夏 名所歌合〔下・二〇二六、二〇六二、二一一九、

二一三一、二一三二、二三五六、二三八三、二

四三〇、×、二五六九〕

8月15日 月三首〔下・二一八六〜二一八八〕

建久六年（二一九五）

2月 五首〔下・二〇六三、二一〇〇、二一四〇、二

三二九、二四六〇〕

2月29日以降 伊勢公卿勅使良経に扈從し鈴鹿関・伊勢で

詠歌〔下・二五四〇、二六九九〕

秋 勅末句十首〔下・二二一一〜二二二〇〕

秋 秋五首〔下・二二二一〜二二三五〕

建久七年（二一九六）

3月1日 良経任大臣後初度作文和歌会〔×〕

7月21日 三首〔×〕

9月13夜 月五首〔下・二一七二〜二一七六〕

9月18日 韻歌百廿八首〔中・一五〇一〜一六二八〕

秋 賦字二十首〔下・二二二六〜二二三五、二四五

四〜二四五八、二五五六〜二五六〇〕

秋 賦字三十一首〔員外・三一〇六〜三一三六〕

11月25日 建久の政変

建久元年以降政変以前秋 賦字十三首〔員外・三一八五〜三

一九七〕

三

建久期良経家歌壇については、既に詳細な研究成果<sup>3)</sup>がある。内裏・仙洞歌壇の空白期、良経は精力的に歌壇經營を行ない、新風和歌の展開に資するところ大であったと評価されるが、それは、九条家家司でもある定家を相手とすることによって、はじめて達成された成果であったともいえよう。勿論慈円や、俊成をはじめとする御子左系歌人、また六条藤家歌人そのほかの参加も、さまざま歌壇内に力学を生じている。しかし、表現の次元では、文治期以来慈円が領導してきた速詠吟を導入し、漢詩文的な背景をもつ新奇な趣向の試みを数多く行っており、良経は「新儀非據達磨歌」の保護者かつ推進者をもって任じていた節がある。

良経家歌壇圏での定家詠作について、後に定家自身はどのような評価を下しているだろうか。その一端を窺うべく、自歌合への採歌状況を整理してみると、次のようになる（後稿本による）。正治期の詠をも含め総計二十六首（前稿本は二十七首。自歌合総歌数は二

百首』は、決して少ない数字ではあるまい。

雪十首歌

花月百首

伊呂波四十七首初度

十題百首

歌合百首

建久五年名所歌合

伊勢廬從詠

建久六年末句十首

韻歌百廿八首

正治元年冬十首歌合

正治二年十題廿番撰歌合

一首

六首（前稿本は七首）

一首

二首

五首

一首

一首

一首

六首

一首

一首

前節に掲げた、良経家歌壇への定家出詠をあらためて眺めてみよう。正編・上に収められる百首歌が三、中に入る非百首定数歌が一、員外に入る賦字勸句等の速詠非百首定数歌が七となつてゐる。正編・下に収められた作品の中では、建久六年秋の末句十首と建久七年秋の賦字二十首は員外所収作品群と全く同一趣向の作といえるが、その他は、歌合・歌会詠、贈答歌など、こと家集への収載状況を見るかぎり、多様な性格の詠作が編纂の俎上に載り、適宜配分されていることがわかる。採否判断の結果、家集からは漏脱したものもある。これらの事象は、裏を返すならば、良経家歌壇とは定家が初めて出会った総合的歌壇であつたことを物語るのである。すると、その歌壇の所産である和歌作品を、どのような家集性格や家集構成の中に配置し、処理しているかを見届けることによって、定家の家集編纂意識、さらに定家にとつ

ての良経家歌壇の意味を、確認することが可能となる。

#### 四

『拾遺愚草』正編の三巻は、上（百首歌集）中（非百首定数歌集）下（部類歌集）の構成をとっている。私家集の展開のなかで、このような構成がとられたのは、定数歌就中百首歌が、和歌詠作の方法、詠歌単位として重視されていくことの反映といえるが、このような形態をとる私家集の先蹤として、正編がその規範・祖型としたものとしては、まず父俊成の自撰家集『長秋詠藻』の構成を考へることができよう。

『長秋詠藻』俊成自撰本の原型は、治承二年三月（同月十五日別雷社歌合出詠歌までを収載するのでそれ以降）に成立し（伝姉小路基綱筆本釈阿奥書、同年夏に守覚法親王へ進覧された（書陵部五〇一・一七二本〈定家筆本の臨写本〉寛喜元年四月二十二日定家奥書）。その構成は、上巻に「久安百首」「述懷百首」の両百首を配し、中巻・下巻は部類歌となしている。私家集史において、百首歌を意識的に巻頭に掲げた自撰家集は、本集をもって嚆矢となすことができる（異本系『忠盛集』が久安百首十部類十雜纂の三歌群という構成をもつが、他撰）。

ところで、『長秋詠藻』上巻の両百首の配列は、詠作年代順ではない。「久安百首」は久安六年（一一五〇）に崇徳院に詠進された応製百首だが、俊成（当時は顕広）は特に院の下命を受けて本百首の部類を行なっている。一方「述懷百首」は、保延六・七年の頃（一一四〇～一一四一）堀河百首題で詠じたもので、崇徳天皇内裏歌壇への参加に何かしら関わる作品と推定される。なお『長秋詠

藻」自撰以前、俊成は兩百首の他、長承元年～保延二年（一一三二～三六）の頃に兩度の「為忠家百首」を詠じている。すなわち、『長秋詠藻』編纂の段階で、俊成の前には四つの百首詠が存在していたことになるが、俊成はこれらのうち、常盤家における兩度の習作的百首は排除して（後度百首）中の一首は部類歌の夏部に編入、崇徳院にかかわる二つの百首を、公一私の性格によつて配置したのであらう。いやむしろ、自身の歌人遍歴の上できわめて意義深い作品としての「久安百首」を家集冒頭に置いて記念することが意識的には先行し、「述懷百首」はそれに準ずる記念碑的作品として付載するというのが、発想の実態ではなかったか。

形態的にみれば、正編と『長秋詠藻』の類似は確かに認められるが、定数歌就中百首歌に関する状況が、『拾遺愚草』と『長秋詠藻』の編纂時ではかなり異なつてきていることも事実である。定数歌詠作の回数が、定家の場合飛躍的に増大しているのである。俊成も『長秋詠藻』自撰以後、五度九種の百首歌と一度の五十首歌を詠ずることになる。和歌史はいよいよ百首歌の時代の様相を呈していく。

## 五

このような意味で、正編に直接の範型を求めるとするならば、良経の『秋篠月清集』を想起しないわけにはいかない。『秋篠月清集』には、安貞二年五月二日定家奥書を有する定家本、承久三年十一月六日書写奥書を付す教家（良経次男）本、および兩系の混淆本がある。定家本は良経手紙の自筆草稿本の写で、「百首愚草」「式部史生秋篠月清集」の二巻から成り、「百首愚草」に定数

歌を収め、「式部史生秋篠月清集」はさらに上下として、上を四季部、下を祝部より釈教部の部類歌としている。教家本は、元久元年十一月十一日以降二十四日以前に成立して慈円・釈阿の加点を乞うた系統本であるが、全体を「式部史生秋篠月清集」と命名し、上巻を定数歌集、下巻を部類歌集に当てている。定家本の「百首愚草」、教家本の「式部史生秋篠月清集」上巻は、「花月百首」から「千五百番歌合百首」に至る九箇度の百首歌と、二箇度の五十首歌を収載する。百首歌群の最後は「千五百番歌台」のための百首歌だが、『明月記』の記事によれば、同百首は建仁元年六月六日から二十三日頃までの間に、三十人の出詠歌人の作が下命詠進された。一方五十首歌は、建仁元年二月「老若五十首歌合」のための作と、「仙洞句題五十首」（良経作は建仁元年九月詠か）である。すなわち、この定数歌集部分は、百首歌と五十首歌に二分されて、それぞれが詠作年次順に配列されていることになる。

良経がその家集を編纂するにあたって企図したところは、定数歌と部類歌を分離別冊とし、さらに定数歌部分は百首と五十首（非百首）を区分して各々を詠作年次順に配列するということであつた。その非百首定数歌とは、百首歌の縮小定数歌としての五十首歌のみをいい、定家においては非百首定数歌として扱われることになる文治五年女御入内御屏風和歌や釈阿九十賀屏風和歌、五行五方五色十五首歌といった作品はこれに含まず、部類歌中の祝部や雑部に、全体を解体することではなく収めている。五十首はここで準百首としての組織を整えた定数歌と認知されているのである（定家本「百首愚草」の中に入る）、あくまでも百首歌の付随物という扱いである。

なお、『秋篠月清集』の秋部に「虫声非一」の歌題で載る一首（定家本一二七五、教家本一二七八）は、千載集入集歌（秋下・三三〇）であるが、「右大臣（兼美）家後百首」の題と一致しており、良経が同百首を詠じた可能性が指摘されている（他に『摘題和歌集』所載の「古渡千鳥」も同詠かとされる）。この推定が正しければ、習作の百首は、良経においても、『長秋詠藻』同様排除されていることになる。

## 六

定家が本格的な家集を初撰する時点（建保四年春頃）においては、百首歌詠作の活況という時代様相はさらに深化する一方で、非百首定数歌に対する意識も、『秋篠月清集』の場合とはいささか異なってきた模様である。いま、正編・中の所収内容は次のようになっている（名称・年時は目録による。「」は補注）。

- ① 韻歌百廿八首 建久七年秋
- ② 仁和寺宮五十首 建久九年夏
- ③ 院五十首 建仁元年春
- ④ 院句題五十首 建仁元年十一月
- ⑤ 女御入内御屏風歌 建久元年正月
- ⑥ 入道皇太后宮大夫九十賀算屏風歌 建仁三年八月十二日
- ⑦ 最勝四天王院名所御障子歌 建永二年
- ⑧ 院廿首 建暦二年十二月
- ⑨ 後仁和寺宮花鳥十二首 〔建保二年二月三十日〕
- ⑩ 仁和寺宮五十首 承久元年

- ⑪ 権大納言卅首 〔元仁二年三月二十九日〕
- ⑫ 女御入内御屏風歌 寛喜元年十一月

建保四年三月十八日の正編初撰以前に詠じられた作は⑨までであつて、⑩⑪⑫はそれ以降の増補部分となるが、初撰部分においても、④と⑤の間にはつきりとした断層が看取できる。⑤は詠作年次でいえば①より前となるはずである。また、⑤⑥⑦⑧は屏風歌もしくは障子歌のための料歌という共通性も認められる。一見すると⑤の位置のみが詠作年次順から外れて不審に思われるが、実はそうではなくて、準百首として整備された構成内容をもつ非百首定数歌群（①は四季・恋・山家・旅、②③は四季・雑、④は花月恋の結題という構成）がまずまとめられ、それに屏風・障子歌群を配したのが、正編・中の当初の構想であつたものと考えられる。前者は『秋篠月清集』における両五十首（①③④）付載の意義と正しく対応するものであらう。

定家が、屏風歌料歌等をも定数歌の一種としたのは、⑦をどのように到家集内部に収録するかが問題となり、その取扱について得られた結論にもとづいた処理と推定されよう。⑦は四十六の名所を歌題にした作品だが、題構成は季節とは無関係で、①②③④の組織とは異質であるものの、規模は五十首歌に近い。⑦が解体し難いのであれば、非百首定数歌として扱う他はない。すると、同様の性格の料歌であつて、しかも月次構成となる⑤⑥⑧も、この処置に連動して定数歌扱いとなされたものであるらう。『秋篠月清集』においては、⑤⑥は部類歌の祝部に収載されていたことは先に述べた。

最終的に定家は、百首ならざる数十首以上のまとまった歌詠のうち、四季・恋・雑など組題的組織を有する作品や、同一季節や主題にあまり片寄らない作品、すなわちその作品全体を部類歌の特定部立に配当できないものであつて、しかも主催者・下命者が皇族もしくは権門の場合、これを正編・中に収録すべき非百首定数歌に分類したものだと思われる。⑧は、後鳥羽院の下命により院を含め五人の作者で百首を分担詠作したうちの定家詠分、春十首・恋五首・雑五首という変則的な百首断片ともいふべき作品だが、不完全なものながら院下命を記念してここに配置したのであろう。再言すると、正編・中の初撰形態は、準百首歌的な非百首定数歌群を巻頭に置き、それに晴儀の屏風歌・障子歌の料歌類を中心とする作品群を合して、それぞれを詠作年次順に配列したものであつた。初撰以後、増補の段階で、準百首的組成の⑩⑪（⑩は②と照応する）と、⑤と同様の屏風歌⑫が加えられたが、これらは、いったん定められた正編・中の歌集性格の範疇にのつとつた、年次順による単純な増補過程を想定しておけばよいだろう。これらの背景には、非百首定数歌の多様化と頻度の増大が認められる。

## 七

員外撰時の形態としては、I類本（伝国冬筆本）を想定すべきことは既述したが、その基幹部分は、建久元年六月に定家が発意して詠作、慈円・公衡らに波及した「一字百首」（賦字詠）および「一句百首」（勅句詠）の両速詠百首に、建久期良経家歌壇圈内において詠じた賦字詠五、勅句詠一（文字鏤歌廿首）、特殊題詠一（五行五方五色十五首歌）の速吟定数詠を合したものであつた。これら

速詠歌群は、良経家歌壇が定家という人材を得た結果、顕著に示すことができた志向性ともいえる。正編・中の巻頭を飾る「韻歌百廿八首」は、良経家において定家のみが詠じ得た（注記に「他人不詠」とある）作品だが、韻字を和歌の末尾に詠み込むという意味では賦字詠の一種である。また、勅句詠の建久六年秋末句十首、賦字詠の建久七年秋二十首は、正編・下に収載されるが、これらと員外の良経家歌壇詠作との間に、基本的な差異は認め難い。正編への採択にあたつては、ある審美的判断を想定せざるをえないが、逆に、この基本的な差異の認め難さこそが、少なからぬ作品累積を形成してしまつた、良経家歌壇所産のこれら賦字・勅句速詠歌群を、完全に廃棄するにしのびない感情を醸成し、また自歌合への撰入とも呼応しつつ、員外という家集形成の機縁をなしたものとみてよからう。

## 八

定家が全歌集的規模を企図しながら『拾遺愚草』を初撰した時、その範型として意識したのは『秋篠月清集』の組織であつたと考えられる。それは、父俊成が『長秋詠藻』において具現した。百首歌時代の到来を形象化する家集形態を継承したものといえる。

定家は、良経家集に萌芽した非百首定数歌の特立を、その多様化の時代様相の中でさらに肥大化させていった。定家自身にとつて、百首歌＋非百首定数歌＋部類歌という正編の家集構成に正しく照応する初めての総合的歌壇活動は、建久期良経家における詠作であつた。また、員外という拾遺的家集を分立するにいたる経緯においても、良経家歌壇の所産が果たした役割は叙上のごとく決定

的なものであった。

定家の家集編纂意識は、良経家集と、良経家歌壇の所産によって方向付けられたものといって過言ではない。この正編の家集構成は、後に『玉吟集（壬二集）』など全歌集の規模を目指す家集によって模倣・踏襲される。さらに非百首定数歌部分が歌数別順に整理されていくと、『中院通茂歌集』（通茂自筆本）のような形態にいたりつくことにもなる。中世以降の定数歌詠作の多様化に対応するこうした家集形態の淵源に、建久期良経家歌壇における定家の実作とそれに対する認識があったことを確認しておきたい。

注(1) 草野隆 『定家卿百番自歌合』の結番方法（上智大学国文学論集16 昭和58・1）、『定家卿百番自歌合』雑部の構成をめぐって

## 新刊紹介

橋本不美男編

『王朝文学 資料と論考』

本書は元文学部教授橋本不美男先生七十七歳の誕生日（平成四年八月十五日）の完成を期して編集された論集だが、先生はその刊行をまつことなく、平成三年十二月二十五日に逝去された。

て」（同17 昭和59・1）、『定家卿百番自歌合の成立』と改稿し、その一 成立」（同18 昭和60・1）。

(2) 小稿 『員外雑哥』の諸本」（国文学研究82 昭和59・3）。

(3) 小稿 『拾遺愚草』員外第一次本の成立——類本をめぐって——

（橋本不美男編『王朝文学 資料と論考』平成4・8 笠間書院）。

(4) 久保田淳 『新古今歌人の研究』（昭和48・3 東京大学出版会）

ほか。

(5) 松野陽一 『藤原俊成の研究』（昭和48・3 笠間書院）。

(6) 小稿 「翻刻 中院通茂和歌集〔定数歌篇〕」（早稲田大学高等学院研究年誌33 平成元・3）。

ここに収められている二十九篇の論文は、  
・ 兼築信行・中田大成（敬称略、掲載順）と  
いった人々が名を連ねている。

早稲田大学等において先生の教導を得た人々によって捧げられたものであり、中古・中世の和歌・歌謡・物語・日記、また古筆学や文献学にかかわる多彩な内容となった。

（平成4・8 笠間書院 A5判 五二二頁 一五四五〇円）

〔兼築 信行〕

早稲田の関係者では、発起人に藤平春男・井上宗雄、論文執筆者に松野陽一・内田徹・浅田徹・今井明・小野恭靖・上野理・八嶋正治・吉井美弥子・辻田弘之・石川一